

復刻版

堺利彦
大杉栄

ほかに編

家庭雑誌

全6巻
総54冊



家庭雑誌
第六卷第一號

明治四十二年四月一日

夕暮

霞まじく半天を蓋ふてゐた
 な光は流れた。流れてそして
 人々はぞろぞろと行つた。
 ひたひたと、埃を蹴つて行く
 さる、人、埃を蹴つて行く
 暮の町は明かなる混乱の
 自分も其の中を歩るい
 處に來た時、練兵の歸
 年若き士官は飢を閃めか
 馬糞、鹽液等により
 そして瀧々々、さも時
 歩いて行つた。人
 の軍服を見た。羨望
 哀愁となつた。人々
 行つた。ぞろぞろと
 を漕ぐべく、餘り
 静な持た無かつ
 自分は鉛の様

●1903(明治36)年4月～1907(明治40)年8月、1909(明治42)年4月・5月

●すいせん——小田実、向坂逸郎、西田勝、樋口恵子(五十音順)

ことある
 に出會つた。
 兵卒は土、
 つてゐた。
 の混乱の中な
 次ぎに兵卒
 に失意となり
 兵卒は瀧々々と
 づつて同僚と涙と
 りれて、餘裕と平
 ぼくは歩いた。

不二出版

●復刻の辞

『家庭雑誌』は、明治三六年四月に堺利彦が自ら創業した由分社より発行し、明治四三年七月の終刊までに合計五六冊刊行された啓蒙雑誌である。その間、社会情勢の変化に伴い、編輯も西村清山、大杉栄、深尾韶、堀保子等が次々に担当し、発行所も由分社→家庭雑誌社→平民書房→家庭雑誌社と変わってゆく。このような変化の中で一貫していたのは、家庭の中から社会主義を進展させ、かつ家庭の近代化をはかろうとしたことである。

日本で資本主義体制がほぼ確立し、それに伴う問題が露呈していた明治後期において、『家庭雑誌』では新しい家庭のあり方、夫婦のあり方、戦争の問題等を、欧米諸国の食物や風俗の紹介、書物の紹介、家庭園芸欄等をはじめながら、堺利彦とその仲間らしい、ユーモアを交えた暖かい視点で捉え、論じている。女性の執筆者が少ないという時代の制約は免れていないにせよ、堺利彦、石川旭山、木下尚江、安部磯雄、大石禄亭、中尾傘瀨、山口孤剣、深尾韶、堀保子、大杉栄、荒畑寒村等々の執筆陣を見ても、その内容の豊かさがかがやうかであるであろう。

『家庭雑誌』は、家庭や婦人の問題を考えることから発して、同時に社会問題への視点を啓発し、うとする独特な存在の雑誌であったのである。弊社では『家庭雑誌』全六巻に、別冊として解題・総目次・索引を付して復刻・刊行する。

今回の復刻が、婦人問題やいわゆる家族問題にとどまらず、明治後期の社会主義者たちの思想・行動の一面を認識する上で日本近代史研究家にとって重要な手がかりとなることを信じているのである。

●すいせんの言葉

『家庭雑誌』を推す

小田実

堺利彦が革命家——おそらく明治以来日本がもったただひとりの革命家だったとさえ私が考えるのは、彼が日本の政治の革命を考えただけではなく、日本人ひとりひとりの生き方の革命まで志していたからだ。

といて彼はやみくもにおどろおどろしい叫びをあげていたわけではない。結婚のこと、家庭のこと、家庭での料理のこと、子供の教育のこと、はては犬ネコの飼い方までことごとまかに暮しのヒダにまではいりこんだ形で、彼は変革、革命のことを考えた。まことに彼は革命家であつたにもかかわらず、そうした家庭の瑣事を論じたのではない。革命家であつたからこそ、まさに論じた。そのもろもろ、彼の革命的大著『家庭の新風味』、あるいはこの『家庭雑誌』の中にある。読者諸氏は彼の革命への志を多とされよ。

(作家)

『家庭雑誌』を推す

向坂逸郎

昔社会主義者たちは一団をなしていた。ある時代にはごく少数の人々が、一定の規約を有つ組織というには余りに少数の人々が集つていた。彼等が集らざるを得ないような世情であつた。世間が、その人々をして集団をつくり自ら団結せざるを得ざらしたといつてよい。

『主義者』とよばれて、社会主義者として一団をなしていた。その中にアナキストの一団もあつた。また改良主義的社会主義的人々の一団もあつた。その他いろいろの人が一団をなしていた。これらの人々を、集団が次第に組織するに至つたといつてよい。その中で堺利彦はすぐれた組織力をもつていた。彼の文筆は次第に修練されて、彼の能力を発揮した。おのずからこの能力者のもとに人々が集まつてきた。

『家庭雑誌』全六巻は、この集団の力の初期に発揮されたものである。この雑誌は明治三六年(一九〇三)四月に現われ、明治四〇年(一九〇九)八月まで続き、いったん休んで、更に四二年四月から七月まで出されたものである。

これは永い我慢強さがなければ出来ないことである。私はこの雑誌に發揮されたねばり強さに、何よりも感心するものである。

後、堺利彦の個人的な威力に直接ふれた者として、このことを強調したい。

(社会主義協会代表)

文学雑誌としても

西田勝

『家庭雑誌』は今から八〇年前、正確には一九〇三年四月、『家庭の新風味』の著者だつた堺利彦が、家庭の近代化のみならず、その社会主義化をもめざして、つまり家庭の徹底した近代化をめざして創めた、毎号平均三六頁弱の小雑誌である。四巻九号——通巻四四冊を出したところで、経営が大杉栄に変わり、途中また平民書房の手に移つたりするが、その編集上の方針は基本的に変わっていない。

毎号平均三六頁弱の小雑誌だからといって、もちろん、その内容が「小」というわけではない。

堺はまず家を「夫婦の組合」であり、その生活する場所を「家庭」と定義する。そしてそこから「夫婦が平等にして相愛し相助け真の共同生活を為すのが家の理想である」と説き、それが現代社会では旧来の家族制度や「黄金万能」の思想によって妨げられていると診断する。だからこそ家庭の理想を実現するためには社会主義を達成して行くほかはないというのが、堺たちが、この雑誌で展開しようとした主張にほかならなかつた。

ひるがえつて今の社会と比較してみると、戦後三七年、たしかに旧来の家族制度は破れ、家が「夫婦の組合」であるという考え方は二応、日本社会の共通の認識となつていっている。しかし、そこに本当に「夫婦の組合」、あるいは「夫婦の平等」が実現しているかといえば、別のことで、「黄金万能」の思想の毒火がますます燃えさかり、「夫婦の組合」であるべき家そのものが壊れ現象をさへ示しはじめているのが現状であろう。

そういう意味では、この雑誌での堺たちの仕事は、きょうを生きる私達の目には、いきおい古風にも古典的にもうつつるが、同時に中でも「黄金万能」の思想が家に及ぼす害悪の指摘とそこからの脱却を訴える情熱の高さにおいて今もなお強烈なアクチュアリテイを失つてはいないのである。

ところで堺が、もと作家であつたことから『家庭雑誌』は最初か

再版
行發日二四一月毎 可認物積新三第 刊二月四年六十三治明

家庭雑誌

編輯 川 枯 堺
號 壹 第
行發日三月四年六十三治明

本誌の特色
我輩の根本思想
ユトピアの話
イソプ教訓談
家庭文庫
古書新書

社 分 由
地番七十日丁一町港新區橋京市京東

第1巻第1号・表紙

家庭に於ける階級制度

堺 枯 川

私は現在の家庭に於て三種の階級制度の行はれて居る事を認める。第一は夫婦間、第二は親子の間、第三は家族と外人の間、これである。私は先づ第一の階級制度に就いて少しく陳述しようと思ふ。

今日の夫婦は互に何と呼んで居るだらう。妻の「おしあな」に對して、夫の「おい」これが大抵の家庭を通じての呼称である。併しこれは漢學流に云へば「夫唱婦隨」で、敢て「思慕」とはせず、女もそれで満足して居る。最も年の若い夫婦の連れたる中では折々反撥心の強い人が居るに、中には婦人は「おしあな」と云つて男子から受けて居る此重く「思慕」は必死に取除かうとするけれど、久しきに亘つた積弊の恐ろしさに、終に悔悟の効をも奏せず、泣き入りとなるのが其結果であつた。やがてそれが人の妻となり、生涯の経験を充分に積んだ後の日、自分の娘を諭す言葉に曰く

「兎や女とはどうしたものか、何と云つても仕方がない。若し又娘が其嫁入先から、何か苦状を持たんて歸つていも来たならば、母親は只一言かき云つて頭から諦めさせる。汝は女だもの。男に従つて行くのが本當です。かくして幾時代となく經過する内には、此不公平なる階級的思想が何時か普通の思想となり、兎も何表面法でも平和と云ふものが保て、来たのである。併し行く、かゝる不健全な思想が何時か其生命を保持して行く事が出来やうぞ。現に女子教育が盛になつて、これ流女子の頭上に掛つて居る階級が、明に認められた今日、一大改革の急務である事は當なく説明するまでもないであらう。

今假りに今日の男女が結婚せんとする其事情動機なるものを吟味して見やう。男子の方から云へば、年頃で、生活に餘裕が出来た、即ち其がある職業に就き、今後は獨立して生計を営んで行く事が出来る、かうである。それ故、細君を買はう、若しくは妻を取らうと云ふ。だが私はこの買はう、取らうが氣に食は

第2巻第2号

再版
行發日二一月年四十四百九千一

家庭雑誌

編輯 川 枯 堺
號 壹 第
行發日三月四年六十三治明

本誌の特色
我輩の根本思想
ユトピアの話
イソップ教訓談
家庭文庫
古書新書
僕もおばアさんが欲しい(小説)

社 分 由
地番七十日丁一町港新區橋京市京東

第1巻第1号・表紙

家庭に於ける階級制度

堺 枯 川

私は現在の家庭に於て三種の階級制度の行はれて居る事を認める。第一は夫婦階級第二は親子階級第三は兄弟階級である。これら三種の階級制度は互に少くも連帯して居る。第一階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第二階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第三階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第四階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第五階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第六階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第七階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第八階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第九階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第十階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第十一階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第十二階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第十三階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第十四階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第十五階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第十六階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第十七階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第十八階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第十九階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第二十階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第二十一階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第二十二階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第二十三階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第二十四階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第二十五階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第二十六階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第二十七階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第二十八階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第二十九階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第三十階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第三十一階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第三十二階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第三十三階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第三十四階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第三十五階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第三十六階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第三十七階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第三十八階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第三十九階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第四十階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第四十一階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第四十二階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第四十三階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第四十四階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第四十五階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第四十六階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第四十七階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第四十八階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第四十九階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第五十階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第五十一階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第五十二階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第五十三階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第五十四階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第五十五階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第五十六階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第五十七階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第五十八階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第五十九階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第六十階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第六十一階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第六十二階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第六十三階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第六十四階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第六十五階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第六十六階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第六十七階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第六十八階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第六十九階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第七十階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第七十一階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第七十二階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第七十三階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第七十四階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第七十五階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第七十六階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第七十七階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第七十八階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第七十九階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第八十階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第八十一階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第八十二階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第八十三階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第八十四階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第八十五階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第八十六階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第八十七階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第八十八階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第八十九階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第九十階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第九十一階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第九十二階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第九十三階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第九十四階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第九十五階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第九十六階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第九十七階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第九十八階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第九十九階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。第一百階級の階級制度は互に少くも連帯して居る。

第2巻第2号

子の欲望する自由戀愛

大 杉 榮

「自由戀愛」の理想は、自由の自由なる男女關係を指す。其の中に「我々」は將來の自由なる男女關係を望む。と云ふ。何にか必然とした、併し其の希望のあるやうな文字があつた。予は此の「將來の自由なる男女關係」即ち自由戀愛に就いて、眞面目に且つ大膽に子の欲望する所を書いて、讀者と共に細心の研究を試みたい。現社會は、黄金の社會、掠奪の社會、貧窮の社會、競争の社會、愚昧の社會である。戀愛も亦幾多の障礙と放障と邪魔とに出遭つて、跡かたもなく踏躓られてゐる。そして兩性の結合は、必ずや、偶然に成立するか、或は貪婪の犠牲に因るに在る。此の破られたる戀愛の體、偶然的結合の思、犠牲的結合の體とを自覺して、男女の關係を絶ての程、脱出せしめんとする。是れ即ち自由戀愛の本質である。然るに現社會は、戀愛とは、永義相容れざる仇敵である。戀愛の種子を縛る鎖は、「資本」として、嫁姑深い現社會の主人に握られてゐる。戀愛が其の美しき頭をもたげて、自由の野に舞ひ出でんとするには、先づ此の鎖を打ち破らねばならぬ。即ち先づ「資本」と云ふ現社會の經濟網を破壊せねばならぬ。自由戀愛の花は、共產制度の野に於て、始めて其の高き句を放つのである。

第5巻第2号

行發日一二月年四十四百九千一

家庭雑誌

卷 六 第
號 一 第
行發日一月四年二十四治明

Dai 6 Kan. KATEI ZASSHI Dai 1 Go.

夕暮 村一
自由結婚は良か悪か乎
女子の解放 田岡 楳 九
大功記尼ヶ崎の段を讀む 沖島 五 點 二
夫婦の力 勝間 舟 人 二八
家庭と劇 岡村 楳 紅 二九
風流旅視 山田 旭 南 三〇
春の恨 秋の 人 三二
小品一編 徳永保之助 三三
壺中雜觀 刀根 壺 水 三三
父の家 守田 有 秋 三五
花壇の作方 老 花 守 三三
編輯者より 老 花 守 三三

社 誌 雜 庭 家
地番二十百二町人百仲保久大下府京東

第 卷第 号

これは永い我慢強さがなければ出来ないことである。私はこの雑誌に發揮されたねばり強さに、何よりも感心するものである。後、堺利彦の個人的な威力に直接ふれた者として、このことを強調したい。(社会主義協会代表)

文学雑誌としても 西田 勝

『家庭雑誌』は今から八〇年前、正確には一九〇三年四月、『家庭の新風味』の著者だった堺利彦が、家庭の近代化のみならず、その社会主義化をもめざして、つまり家庭の徹底した近代化をめざして創めた、毎号平均三六頁弱の小雑誌である。四巻九号——通巻四四冊を出したところで、経営が大杉栄に変わり、途中また平民書房の手に移ったりするが、その編集上の方針は基本的に変わっていない。毎号平均三六頁弱の小雑誌だからといって、もちろん、その内容が「小」というわけではない。

堺はまず家を「夫婦の組合」であり、その生活する場所を「家庭」と定義する。そしてそこから「夫婦が平等にして相愛し相助け真の共同生活を為すのが家の理想である」と説き、それが現代社会では旧来の家族制度や「黄金万能」の思想によって妨げられていくと診断する。だからこそ家庭の理想を実現するためには社会主義を達成して行くほかはないというのが、堺たちが、この雑誌で展開しようとした主張にほかならなかつた。

ひるがえって今の社会と比較してみると、戦後三七年、たしかに旧来の家族制度は破れ、家が「夫婦の組合」であるという考え方は二心日本社会の共通の認識となつていっている。しかし、そこに本当に「夫婦の組合」、あるいは「夫婦の平等」が実現しているかといへば、別のことで、「黄金万能」の思想の毒火がますます燃えさかり、「夫婦の組合」であるべき家そのものが壊敗現象をさ示しはじめているのが現状であらう。

そういう意味では、この雑誌での堺たちの仕事は、きょうを生きる私達の目には、いきおい古風にも古典的にもうつつだが、同時に中ても「黄金万能」の思想が家に及ぼす害悪の指摘とそこから脱却を訴える情熱の高さにおいて今もなお強烈なアクチュアリティを失つてはいないのである。

ところで堺が、もと作家であつたことから『家庭雑誌』は最初から文学的色彩が強く、例えば六号全号を挙げて堺自身の創作ともいつていいペラミの『ルッキング・バックワード』の抄訳を掲げるなど、日露戦争前から戦後にかけての社会文学動向を観察するのに逸することのできない雑誌であるのみならず、特に日本における社会文学運動の先駆的な企てである雑誌『火鞭』が発刊したあとは、その後雑誌であるかの様相を呈している。とりわけ経営が大杉栄に移つたあたりでは、大杉をはじめとして荒畑寒村や上司小剣や徳永保之助ら、しばしば小説や詩やエッセイを寄せていて、一見「近代思想」ではなにかと見紛うほどの趣きを見せているのである。(法政大学教授)

女性観の発展 樋口 恵子

現在の「進」的といわれる男性の多くと同様に、わが国に初めて系統的にマルクス主義を紹介した社会主義者・堺利彦も、この女性問題においては矛盾の人であつた。貧しき者のために怒りつつ、妻をないがしろにして遊廓に通つた、などというエピソードは、当時の社会主義者に決して珍しくない。堺利彦もその一人ではあるが、彼のおもしろさたのもしさは、矛盾の中から徐々に考えをあらため、その女性観を發展させているところにある。男尊女卑の儒教的教養が血肉化した当時の男性にとつて、この柔軟性は瞠目に値する。

その柔軟性は、彼が天下国家を上からでなく、家庭生活のレベルからとらえる人だつたからこそ持ち得たのではないだろうか。天下国家を家庭やくらしと離れて論ずればいい気分かもしれないが、彼はその道を選ばず、まず家庭のあり方に目を向けた。家庭を社会の縮図として、そこから改革の一步を始めようとした。『家庭雑誌』の創刊にあたり、「夫婦の組合を家と云ひ、其組合ひたる夫婦の共に住む場所を家庭と云ふ」「夫婦が平等にして相愛し相助け真の共同生活を為すのが家の理想である」と言い切つてゐるのは、彼の面目躍如たるものがある。当時の常識からいへば「大の男」らしからぬ家庭へのこだわり方こそ、今もまた見直されてよいと思う。現代の目から見れば限界を持つにしても、この『家庭雑誌』にみる、男性自ら「家庭生活」から逃げまいとするこだわり方は、現代に通じる新鮮な問題提起を持つている。(評論家)

既刊図書のご案内

社会文学雑誌叢書第I期概要

関連図書のご案内

徳富蘇峰 主筆

家庭雑誌

全11巻・別冊1

『家庭雑誌』は、平民主義をとらえた徳富蘇峰を主筆として、明治二五年九月『国民之友』の姉妹誌として、家庭雑誌社より創刊され、明治三二年八月まで全一一九号が発行された。

本誌は、新しい時代にふさわしい社会改革を、家庭と女性の改革に求めた蘇峰の思想を最もよく反映しており、『女学雑誌』をはじめとする明治期婦人論の研究に不可欠な重要資料である。

- 推薦 江刺昭子／坂本武人 中島邦／中村青史
- A5判・上製・函入 総8、340頁
- 別冊 解説(吉田正信) 総目次索引
- 揃定価 198、000円

1. 家庭雑誌 全六巻

堺利彦・大杉栄ほか編
一九〇三(明治三〇年)〜一九〇七年
菊判・原型版(函入)／総一、五五〇頁
総五四冊・付録二冊・別冊一
解題 鈴木裕子
定価 四八、〇〇〇円

5. 近代思想 全一卷

大杉栄・荒畑寒村編
一九二二(大正元年)〜一九二六年
菊判・合本版(全一冊)／総一、三六〇頁
解題 堀切利高
定価 九八、〇〇〇円

9. 新社会 全七巻

堺利彦編
一九一五(大正四年)〜一九二二年
菊判・合本版／総三、四一八頁
解題 堀切利高
定価 七五、〇〇〇円

2. 天鼓 全二巻

田岡嶺雲編
一九〇五(明治三八年)〜一九〇六年
B5判・合本版(全二冊)／総一、三三四頁
解題 西田勝
定価 二八、〇〇〇円

6. 第三帝国 全九巻

〔附〕新理想主義

茅原華山・石田友治編
一九一三(大正二年)〜一九一八年
A4・A5判・合本版／約四、二四頁
解題 松尾尊光
定価 一七〇、〇〇〇円

10. 国家社会主義 全一卷

高島素之編
一九一九(大正八年)
A5判・合本版／総二七三頁
解題 田中真人
定価 四八、〇〇〇円

3. 火鞭・ヒラメキ 全一卷

白柳秀湖ほか編
一九〇五(明治三八年)〜一九〇六年
B5判・合本版(全一冊)／総六四四頁
解題 西田勝
定価 一五、〇〇〇円

7. へちまの花 全二巻

堺利彦編
一九二四(大正三年)〜一九二五年
A3・A5判・合本版(全二冊)／総二、三六頁
解題 荻野富士夫
定価 五〇〇〇円

11. 洪水以後 全一卷

茅原華山編
一九一六(大正五年)
B5判・上製／総五九八頁
解題 福田久賀男
定価 一八、〇〇〇円

4. 簡易生活 全一卷

上司小剣編
一九〇六(明治三九年)〜一九〇七年
菊判・合本版(全一冊)／総一九八頁
解題 西田勝／解題 岡野幸江
定価 三、八〇〇円

8. 反響 全二巻

生田長江・森田草平編
一九二四(大正三年)〜一九二五年
菊判・合本版(全一冊)／総一、六八八頁
解題 浦西和彦
定価 一八、〇〇〇円

12. 文明批評 全一卷

大杉栄編
一九一八(大正七年)
菊判・上製／総一五二頁
跋 荒畑寒村・西田勝／解題 堀切利高
定価 四、六〇〇円

復刻版概要

家庭雑誌

- 第一巻 明治二六年四月〜二月
- 第二巻 明治二七年一月〜二月
- 第三巻 明治二八年一月〜二月
- 第四巻 明治二九年一月〜九月
- 第五巻 明治二九年一月〜翌年八月
- 第六巻 明治四一年四月〜五月

内容 一九〇三年〜一九〇七・九年
全六巻／総五四冊・付録二冊・別冊一
体裁 菊判・原型版・函入
別冊 解題(鈴木裕子)
総目次・執筆者名索引
付録 第六巻第三・四号
定価 四八、〇〇〇円

女性史関係資料復刻版

好評発売中!

青鞥

内容 一九二一年〜一九二六年
総五二冊・別冊二／八、八〇〇頁
体裁 A5判・原型版・函入
別冊 解題(井手文字)・総目次・索引
定価 一一〇、〇〇〇円 (分割払可)

廓清

内容 一九一一年〜一九四五年
全35巻(総33冊)別冊一／一七、〇〇〇頁
体裁 B5判・上製
別冊 解説(竹村民郎)・総目次・索引
定価 三〇〇、〇〇〇円 (残部五組)

不二出版

東京都文京区本郷五、二八、三
電話 〇三・八二・四四三三
振替 東京六十九四〇八四